

## 絵本と民話

矢口 裕 康

### 1 体験の産物としての文学

「うんちも文学になる」

へんな着眼と思うだろうが、文学は体験の産物でもあると認識している私としては、大発見の一つとなった。その切掛けをつくってくれたのが、ここに登場する一篇の詩である。

がっこうから はしってかえって

うんちをしました

パンツをぬいたら

いきなり にゅっとできました

ながいなあと見ていたら

べんじょのさきまでありました

大ごえでおかあさんをよんだら

ヒャーといって びっくりしていました

ぼくがした うんちで

これが一ばん大きかった

おとうさんのちんちんより

すぐくながいです

ぼくは よるまでながさなかった

おねえちゃんもびっくりして

ものさしではかってくれたら

30センチもありました

鹿島和夫学級の一人、なるおたかすみ君の詩である。うんち(ち)が詩になったのである。この詩は昭和六十一年四月放映のTVドラマ「大人になるまでガマンする」にも導入された。TV製作者側からも注目された詩といえる。さて、子どもは生まれつきの詩人であるという一面をもつことを以前提示したが、子どもにとって、また昔話にあって、うんちも作品化する対象となるということである。後述する「猿蟹合戦」の助っ人には一人に牛のくそ(ふん)の登場がみられる。<sup>(注・1)</sup> うんちを素材とした絵本もある。<sup>(注・2)</sup> 梅田俊作・佳子・海緒、作絵からなる『がまんだがまんかうんちうち』(岩崎書店・一九八一)である。父、母、子三者の共作の絵本であるが、主人公はみおちゃんである。このみおちゃんが学校をでてから(実ははる前から便所に行きたかったのだが)便所にいきたくなくなり、帰り道の街の中で、その場所をさがしながら、結局は……という内容の絵本である。おそらく作者の一人梅田海緒ちゃんのみおちゃんそのひとであろう。文学をよみとれる一つに、この体験というこやしは必須なものである。私にとって、この

みおちゃんの、がまんだがまんだうんちっちの気持ちは痛い程よくわかった。店頭で、この表題をみただけで手にとり読んでみたい気持ちをおこさせてくれた。そこには、私にも、みおちゃんと同種の体験をしたという思いがあるからである。私にとって追体験としての絵本ともなった。みおちゃんの気持ちに共感し、ストーリーをおっていく私、いつもこんな側面があったらとも思ったしだいである。つまり、文学は体験の産物でもある、という結論へと辿りついた。海緒の体験がなくて、この一冊の絵本『がまんだがまんだうんちっち』は誕生しなかったのである。

現在、文学が「よむ」のみでなく、「みる」「かたる」「きく」そして「かく」へと多様化していく中で、子どもたちと共感できる多くの素材を発見できる自己でありたいと、熱望するしだいである。

また文学は発展するものであるともいえる。「チューインガム一つ」と題する、小学校三年生村井安子の詩がある。

せんせい おこらんとって

せんせい おこらんとってね

わたし ものすごくわるいことした

わたし おみせやさんの

チューインガムとってん

一年生の子とふたりで

チューインガムとってしもてん

すぐ みつかってしもた

きつと かみさんが

おばさんにしらせたんや

わたし ものもいわれへん

からだか おもちゃみたいに

カタカタふるえるねん  
わたしが一年生の子に

「とり」いうてん

一年生の子が

「あんたもとり」いうたけど

わたしはみつかったらいややから

いややいうた

一年生の子がとった

でも わたしがわるい

その子の百ばいも千ばいもわるい

わるい

わるい

わるい

わたしがわるい

おかあちゃんに

みつからへんとおもったのに

やっぱり すぐ みつかった

あんなこわいおかあちゃんのかお

見たことない

あんなかなしそうな おかあちゃんのかお見たことない

しぬくらいたかかれて

「こんな子 うちの子とちがう 出ていき」

おかあちゃんはなきながら

そないいうねん

わたし ひとり出ていってん

いつでもいくこうえんにいったら

よその国へいったみたいなきがしたよ

せんせい

どこかへ 行ってしまお とおもた

でも なんぼあるいても

どこへもいくとこあらへん

なんぼ かんがえても

あしばかりふるえて

なんにも かんがえられへん

おそうに うちへかえって

さかなみために おかあちゃんにあやまってん

けど おかあちゃんは

わたしのかおを見て ないてばかりいる

わたしは どうして

あんなわるいことしてんやろ

もう二日もたっているのに

おかあちゃんは

まだ さみしそうにないている

せんせい くないしよう

この詩に初めて私が出会ったのは、LPの中の一曲としてであった。たしか大学一年生の時、今から十八年前だが「想い出の赤いヤッケ」高石友也フォーク・アルバム（SJV1279日本ビクター株式会社）を買い求めた。高石友也のコンサートにゆき、そこで聞いた「想い出の赤いヤッケ」が好きになり買ったのである。そのA面の最後に、村井安子作詩・高石友也作曲・近藤進編曲の「チューインガム一つ」があった。さして気にもとまらぬ、暗い曲という印象であった。むし

ろなんで、こんな詩に曲をと思ったほどであった。しかし頭の片隅に残っていたのか、絵本『チューインガム一つ』に出会った時は、あの曲がどう絵本になったのかと、迷わず買い求めてしまった。灰谷健次郎・文、坪谷令子・絵の理論社発行の縦十六・一センチ横二十一センチの絵本であった。この絵本も暗いなあという当初の印象を裏づけるものでしかなかった。

しかしである。『1001人のかみさま』（理論社・一九八五）という子どもの詩を集めた作品集に出会った時、この印象は一変した。「チューインガム一つ」が小学校三年生の詩であり、万引きという子どもがおこなった行為をとおして、教師と子どもの葛藤の中から、とくに安子の辛い時間の中から生まれできた詩であるとする、灰谷の解説を読んだ時、イメージは一変したのである。灰谷は、同書でこの詩のあとに「小学校の三年生の子が書いた詩とは思えないという人が多いやけど、どうして三年生の子にこんな詩が書けたんかということや。はじめこの子は、ごく簡単に紙きれに『ドロボーをしました。もうしません』と書いてもってきたんや。おかあさんにひきずられてきたんやな。ぼくが『安子ちゃん ほんとのこと書かないかな』というたら、それでまた激しく泣きだしてしもうたわけやね。それから、おかあさんに帰ってもらって教室で向かい合ったわけや。彼女は一字書いては泣き、一行書いては泣くわけやね。それはぼくにとても、ものすごくつらいことや。だけど、この子が盗みという行為で失った人間性を、もう一回取り戻してつよく生きるためには、この厳しい時間がどうしても必要やとぼくはそのとき思うたんやろね。きっと。ふたりに涙こぼして書いたんや。つらい時間を耐え抜いて、そしてこの美しい詩が生まれたんやね」とコメントをつけている。教師は灰谷自身であるうが小学校三年生の詩が、絵本・唄へと発展していった事実にも

驚いた。

このように、文学は発展かつ成長していく力をもったものである。村井安子の詩が、灰谷健次郎に、そして高石友也に訴えかける力を持っていたからこそ、詩・絵本・唄という三形態としての現在である。文学のすばらしさにふれた気がした。このすばらしさが実感できる自分でもありたい。

## 2 再び猿蟹絵本を考える

私が、現在まで確認した「猿蟹絵本」は、自著『昔ばなしと幼児教育』（鉾脈社・一九八三）の中でも提示したように二十四点であった。しかし、その後、ここ二・三年に次の四点の絵本が出版された。

②⑤ 『さるとかに』（メルヘンおはなし絵本）高橋克雄、写真・文／東京プロダクション製作／昭和58年刊・小学館・四九〇円・右開き（縦26・9センチ×19・7センチ）

②⑥ 『さるかにがっせん』（にほんむかしばなし）岩崎京子ぶん／長野博一え／昭和59年4月刊・フレールベル館・八八〇円・右開き・（縦

表① 猿蟹絵本比較表

<p>A 会いと交換)</p> <p>。「ある秋のはれた日」</p> <p>。おなかをすかせためんどうくさがり屋の猿、一粒の柿の種拾い子蟹のためと思っていた小さい蟹</p>	<p>世界名作ファンタジー⑩『さるかにばなし』企画・構成・文／平田昭吾・画／井上智（ポプラ社）昭61・1刊</p>	<p>。「むかしむかしのことです」</p> <p>。猿蟹・河原の道で遊ぶ。</p> <p>。猿柿の種一つ、蟹「おむすび」一つ拾う。</p>	<p>世界の名作文庫②『さるかに』三越左千夫／文・高橋宏幸／絵（金の星社）昭60・1刊</p>	<p>。「むかしさるとかにがつれだつてのっばらにあそびにいっただと」</p> <p>。蟹、草の中にぎりめし、猿、柿の種みつける。</p>	<p>にほんむかしばなし『さるかにがっせん』岩崎京子／文・長野博一／絵（フレールベル館）昭59・4刊</p>	<p>。「裏山に、おむすびがころんとおちていました」</p> <p>。子蟹みつけた「おむすび」を意地めっこのお猿にだまされ交換。</p>	<p>メルヘンおはなし絵本⑩『さるとかに』高橋克雄／写真・文（小学館）昭58・10刊</p>
----------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------

26・4センチ×横21・2センチ)

②⑦ 『さるかに』（せかい名作ぶんこ42）三越左千夫ぶん／高橋宏幸え／昭和60年刊・金の星社・五八〇円・右開き（縦21・6センチ×横15・6センチ）

②⑧ 『さるかにばなし』（世界名作ファンタジー）平田昭吾ぶん・企画・構成／井上智之え／昭和61年刊・ポプラ社・四五〇円・右開き（縦17・6センチ×横18・7センチ）

②⑨ 猿蟹絵本は、小学校教材の一つとしても『かさこじぞう』（ポプラ社むかしむかし絵本）がとりあげられている岩崎京子の文になる絵本であるが、以上②⑤②⑧の四点のうち、岩崎サルカニを除いた三冊には、次のような共通項を見出すことができる。

第一はアニメ化傾向を、先ずあげることができる。そして第二に、「猿蟹合戦」の採話を忠実に再話（再創作）した絵本を、親蟹の死を含む②⑥もそうであるが仇討ち型の絵本とすれば、青柿を投げつけられた蟹が死には至らず、ケガという形で最後には蟹も猿も助っ人みんなも仲良くなるという形で結ぶ「仲直り型」とでも称するものが、三冊の共通項である。

	D (助っ人の登場)	C (親蟹の死)	B (柿の種の成長)	(猿と蟹の出)
<p>○ 臼 (屋根) 栗 (囲炉裏の灰の中)</p>	<p>○ このニュースをきいて、蜂・栗・臼が見舞いにき猿のひどいしうちを聞いて怒る。 ○ みんなで蟹の仇きをうつことを誓う。</p>	<p>× ゴツーン! (子蟹はお腹をすかせているのだから猿に早くとってくれと嘆願↓お母さん蟹怒り叫び↓青い渋柿を猿投げる↓お母さん蟹に命中し、はさみがおれてしまう)</p>	<p>○ 柿の種びっくりし蟹のはさみでちよんぎられてはと思ひ芽に↓種に生命。唱え言あり。 ○ 種↓(びっくり、たまらない、あわてて) ↓芽(たまらない、あつというまに) ↓木↓白い花をいっばい↓(いそいで) ↓柿の実を枝いっばい↓はじめ青柿↓赤し熟し甘柿</p>	<p>○ 「おにぎり」を柿は育てればおいしい柿を毎年食べられる、また猿は「腹ぺこぐう病で死んでしまふから」と納得させ交換。</p>
<p>○ 栗 (囲炉裏の灰の中) 蜂 (水がめのかげ)</p>	<p>○ 子蟹びっくりし泣いているところへ蜂・栗・臼が来、子蟹の依頼で仇討ちへ行く。 ○ 蜂わけを聞き怒り栗に話し、栗は臼に話す。</p>	<p>× ごつん (猿にとつてくれと依頼↓青い実渋くて口がまがりそうなのを落とす↓蟹、口からあわをふきながらどなる↓くいしん坊で意地の悪い猿は青い柿の実をもぎりとり投げる↓かたい柿の実、蟹のこうらにごつんとあたる↓叫び声をあげばったり倒れる)</p>	<p>○ 子蟹と一緒に庭にまく。 ○ 種(たいへんと) ↓芽↓(たいへんとずんずんのびて、いつのまにか) ↓大きな木↓(たいへんと、まもなく) ↓実をいっばい↓(たいへんと) ↓柿の実は赤く色づく。 ○ 種に生命。唱え言あり。</p>	<p>○ くいしん坊の猿は毎日いっばい実がなつて食べられると、蟹を説得し交換。</p>
<p>○ 臼 (屋根) 牛のくそ (入口) くまんばち (水がめのそば) しばぐり</p>	<p>○ 子蟹、親蟹のお腹の下から「わさわさと」誕生、どうしべえと泣いてみると、しばぐり・くまんばち・牛のくそ・臼が来、助っ人をしてくれる。</p>	<p>○ かしや (猿自分のものだ、こりこり、もぐもぐ食べ出す↓蟹何べんも丁寧に頼み↓猿了解↓猿まだ青い堅いのをもぐと↓運悪く蟹の甲らにあたり↓親蟹つぶれて死ぬ)</p>	<p>○ 柿の種↓(ちよんぎられてはかなわんと) ↓芽↓(大あわてでのびた) ↓実↓(うれる) ○ 唱え言あり。</p>	<p>○ 蟹だまされて交換。</p>
<p>○ 「みんなかくれて猿の帰りを待つことにしました」 ↓文・写真にも</p>	<p>○ なかよしの臼・栗・蜂、自分から仇討ちへ行く。</p>	<p>× (甘い柿だけ猿はどんどん食べ渋い柿を母さん蟹・子蟹へびゅんびゅんと投げる↓子蟹渋くて泣く、母さん蟹は痛くて泣く)</p>	<p>○ 親子で種を植える。 ○ 種↓(唱え言) ↓小さい芽↓(唱え言) ↓柿の実↓(ぐんぐん大きくなって) ↓秋に赤い実をたくさんつける。</p>	

(注 ○×はさし絵の有無を表す)

価格	場面数	F (結末)	E (助っ人、仇討ち配置)
450円	44	<p>○猿悲鳴をあげる↓なんどもあげる ↓(お母さん蟹許す)↓改心する ↓蟹の家の柿の木に登る↓真つ赤にうれた甘い柿の実をたくさん取る↓(お腹をすかせた子蟹へぱくぱくお母さん蟹へもぐもぐ▽▽へぱっくりこ▽栗と蜂へぱりぱりこりこり▽と食べる) ○「それからはみんなで仲良くくらししましたとき」</p>	<p>蜂(水がめのうしろ) ○①栗(パーン)尻にはじけ飛ぶ ②蜂お尻を(チクリッ!)さす ③臼入り口の屋根で(ドゥスン)</p>
580円	20	<p>○「そしてみんなで猿をひたてて、親蟹のところへ連れていきました。猿は親蟹の前にすわると『蟹さん、どうぞ許してください。もう悪いことはしません』と、両手をついてあやまりました。そこで親蟹は、猿を許してやりました」</p>	<p>臼(戸口の屋根の上) 子蟹(縁の下) ○①栗(ばーん)猿の顔けとばす↓ ②蜂(ぶーん)尻つきさす↓③臼(どすん)背中へ↓④子がに、縄でしばる。</p>
880円	15	<p>「ぎゅぎゅぎゅおさえつづけるんで猿は逃げだせない。蟹の子達は『親の仇、親の仇』と小さなはさみでつねるやらはさむやら、とうとうあだをうったんだと」</p>	<p>(囲炉裏の中)子ガニ(外) ○①しば栗(ばばーん)猿の顔へはじけ ②くまん蜂(ちくり)台所で鼻をさす ③牛のくそ(つるりん)戸口ですべり ④臼(ぎゅぎゅう)おさえ ⑤子蟹達(つねりはさむ)</p>
490円	19	<p>○猿のしっぱすんづまり↓あやまる↓泣き出す。 ○「一年たってまた秋がきました。柿の木には、去年にも負けないほど赤い実がすずなりになりましたみんなが力をあわせてとりいれます。おや誰かさんも手伝っていますよ」</p>	<p>仇討ちの配置の場面なし。 ○①栗(囲炉裏の灰の中、ばちーん)はじけて飛び猿の鼻のあたりにこっちーん ②蜂、おでこを(ちくーん)水がめでさす ③臼(すっしーん)屋根の上からとびおちる ④縁の下から子蟹猿の尻尾を(ちよっくん)</p>

何故、今、四冊の猿蟹絵本が出版されるのかということにも疑問をもちつつ、このような仲直り型へと傾斜した絵本の傾向にも一石を投じた。そのさい二つの観点から考えてみたい。一つは採話のすばらしさのみなおしという点から、もう一つは、その採話を基にした再話絵本の出現を期待するという点で、十六点の「猿蟹絵本」を、助っ人にポイントをおき検討してみた。

### 3 採話「猿蟹合戦」をみなおす

宮崎県・新潟県の「猿蟹合戦」を一読してみたい。

## 宮崎県・新潟県の「猿蟹合戦」

## 「猿カニ合戦」

A 　むかしむかし。猿どんとカニどんが住んでいました。ある天気の良い朝。カニどんがよちよち坂道を登っていききました。

すると、坂の向こうから、にぎりめしがころりん、ころりん、転がってきたのです。カニどんは、そのうまそうなにぎりめしを、風呂敷につつんで登っていききました。お天道様が山の上までくると、ようやくカニどんが山の上につききました。

山のてっぺんで猿どんに会いまして。猿どんは、カニどんのにぎりめしを見ると、ほしくなつて、

「カニどん。そんなにぎりめしと、こん柿のタネとかえっこすや」といったので、カニどんは、

「いやじゃ、いやじゃ」といいました。すると猿どんは怒つて、

「かえっこせんなら、こんげんこつをかますぞ(打つぞ)」とおどして、取りかえました。猿どんはそのにぎりめしを、

「うめえ、うめえ」といって、昼弁当に食べてしまいました。

## 「猿とかに」

A 　とんと昔があったげど。

あるどこね、かにと猿があったてや。ある秋の、天気の良い日のこんだと。かにが、山の沢から、モザンモザンとあがって来たてや。猿は、山のてっこう(上)から、フランフランとおりて来たてや。かにには、やきめし一つ拾うて、それ、たがいて(持って)来たと。猿は、柿ン種一つふるうて、それ、たがいて来たと。ほうしたれば山の道で、猿とかには、パツタリ出おうたてや。

「おおい、かにどん、かにどん、どごへいぐや。」

「いよう、猿どんか、おらは、あんまり天氣が、いいんだが、沢から、はいあがつて、あそびに出たててんが、こんげな、やきめし一つふるうた。さるとん、お前は、どごへいぐや。」

「おらも、あんまり天氣がいいだんが、山のてっこうから、あそびに出かけたててんが、こんげな、柿ン種一つふるうた。」

ほうして、猿は、かにがたがいている、ンまげな、やきめしが食いたくて、どうしようもねんだが、かにをたらかして取るうと思うて、  
「かにどん、かにどん、お前のたが

## B

にぎりめしを取られたカニどんは一粒の柿のタネをかかえて、山をかけおりに帰りました。

「ガニ太郎、ガニ太郎」カニどんは息子のガニ太郎をよんで、庭の真中に柿のタネをまきました。

それからカニどんとガニ太郎は、

「はよう芽をださんと、ハサミでちよんぎるど」といったので、柿のタネは驚いて、夜の間芽をだしました。朝になると、

「こら、こら、はよふとらんと、またちよんぎるど」とカニどんがいきました。びっくりした柿のタネは、ずんずん大きくなって、青い葉も出しました。そのつぎの朝。カニどんは柿の木に水をかけて、

「はよ、はよ、花を咲かせんか。ぎょうさん柿をならさんか」といいました。それからしばらくすると、花が咲いて実がなりました。

## B

いている、やきめしは、食てしまえば、何にもならん、おらがたがいて、柿ン種は、えべれば、(植えれば)柿がなるど、なじだ、(どうだ)柿ン種とやきめしをかいかいしようねかい。」

「そうか、ほうしッ(それでは)かいしよう。」

ほうして、猿とかには、柿ン種とやきめしを、かいかいしたと。

かにには、柿ン種をまいて、

生いざ、缺きるど

と水くれて、芽の出るがんを、待つていたれば、芽が出たと。こんだは、

ふとらざ、缺きるど

ふとらざ、缺きるど

と手入れして、柿の木のでっこうなるがんを、待つていたれば、でっとうなつたと、こんだは、

ならざ、缺きるど

ならざ、缺きるど

とゆうて、柿の実のなるがんを、待つていたれば、どんど、なつたと。ほうして、秋ねなつて、柿の実が、まっかねなつて、ンまげなつたてや。

C そこへ猿どんがやってきて、

「ほう、こらみごち柿じゃ。まこつ（本当に）うめこつちゃる。ちぎってやるかいな」といいながら、柿の木を眺めています。

すると、カニどんは平気な顔で、「こん柿は、ずくしになるとあえて（落ちて）くるもんじゃ。それまでここで番をするかい、おまえにやたのまんわい」といったのです。

これを聞いた猿どんは、目の玉をむいて怒って、

「カニどん、カニどん。わが何をいうかいな。こん柿はもともとおれがもんじゃ」というなり、するすると柿の木に登って、つきつきに実をちぎって食べはじめました。時にはふところへ入れることもあります。下から見ていたカニどんは、

「猿どん、猿どん、うめつをいっちょ、落としてくりゃい」といいました。すると、猿どんは、青っぽいうらなり柿を一つちぎって、カニどんの背中に投げつけました。カニどんは、

「あ、いてが、いてが」とうめき声をあげて、死んでしまいました。

C かにが喜んで、さあ、柿をもちで

食おうと思つて、柿の木にあらはねたてや。モザンモザンと、ちっとあがれば、へえ、（もう）ズラズラとおちて来て、いくら、あがるとしても、おちてばっかいるてんがな。

ほうしると、猿が、山のてっこうから、とんで来て、

「おらが、もいにくつず（くれる）」  
とつうて、チョコチョコと、柿の木にあがつて、自分ばっか、ンまげにして、柿をもちで食べているがんだてや。

「おおい、猿どん、おさまばっか、食ていねで、おらがどこへも、もいでよこせや」

と、かにが、言つたれば、

「そら、食え」  
と、猿は、もいだ柿に、はなをつけて、投げたてや。かにが、

「きつたね、こんげな柿、食わっずかや」

とつうたれば、こんだ、

「そら、食え」  
と、もいだ柿で、けつをぬぐうて、ほん投げたてや。

「きつたね、こんげな柿、おら、食わんど、いい柿を、どうど、もいでよこせや」

とつうたれば、こんだ、

「そら、食え、そら、食え」  
と、青ずんぼの柿を、どうど、もい

D ガニ太郎は、死んだカニどんのそばで泣きました。

そこへ熊蜂がやってきて、

「よし、よし、おとこん子が泣くむんじゃねえ。いいかい、卵にコンブに唐臼（とううす）どんと話をしておとさんのかたきをとってくるるわいな」といって、ガニ太郎をなぐさめました。

で、かににぶつたれば、かにが、死んでしもたてや。

D ほうして、かにが死んだら、腹の中から、かにの子が出て来て、川へ行って、魚をとっては食い食いついてる中に、でっこうなつたと。ほうして、

「おらも、でこうなつたすけ、猿のばんばへ行って、親のかたきをとつてやると、きびだんごをたがいて、出かけたてや。  
ほうしると、たいがい行くと、ヒョウヒョウと、ヒョウヒョウ票が、ころがって来て、

「かにどん、かにどん、どこへいぐ。」  
「猿のばんばへ、親のかたきうちね。」

「そうか、腰のもんは何だいな。」  
「日本一のきびだんご。一つ食いは千人力。二つ食いは、万人力。」

「ほうしゃ、一つくれ、おらもお供をするど。」

「そうか、そいじゃ、一つやる。」  
ほうして、またいぐと、こんだ、

ブーンブーンと蜂がとんで来た、コロコロと、米つき臼がころがって来た、シクモクと、たたみさし針が歩

んで来た、グワチャラグワチャラと、牛の糞が歩んで来た。ほうして、

ンな（みんな）が、きびだんごをもろてかにのかたきうちの味方になつたてや。



E そのあくる朝。ガニ太郎が猿どんの家に行ってみると、留守でした。いいあんばいに、唐臼は戸口の鴨居の上に登りました。蜂どんは戸棚の中へ、卵どんはいろりの灰の中へかくれました。それからコンブとガニ太郎は、水がめの前にかくれました。

F やがて夕方になって、猿どんが帰ってきました。

「ひーふうひーふうふう」と猿どんはいろりの灰をかきまぜて、火を吹きました。すると、いろりの中にかくれていた卵どんが、

「ぼちん、ぼん」と、はじめてとんだのです。猿どんは鼻の先にやけどをして、水がめのところへ走っていききました。すると、水の中にかくれていたガニ太郎が、猿どんの鼻に近づいたのです。びっくり猿どんは飛びあがったひょうしに、コンブの上ですってんころりんとすべりました。そこへ熊蜂ができて、猿どんのお尻に、一針さしました。

さあたいへん。猿どんは戸口の方へ逃げだしましたが、今度は、戸上の鴨居から、唐臼どんがドスンと猿どんを押しつぶしました。そこで

E ほうして、ンなが、猿のばんばへ着いたてや。そりやども、猿は留守で、いねんだんが、そこで、めいめいの役を、ふりわりしてきめたとヒョウヒョウ票は、いろりのほどの中（火をたくままん中）、かには、水屋の水ぶねの中、たたみさし針は、水屋の戸口のさげむしろ、蜂は、家の窓のどこ、牛の糞は、家の出口、米つき臼は、家の出口の上、そういうがんにきめて、猿が帰ってくるがんを待っていたてや。

F ほうしると、猿が山から、帰って来て、

「ああ、さぶ（寒い）、さぶ」と言うて、いろりに、ボンボン火をたいて、あたったてや。ほうしたれば、ほどにかくれていた、ヒョウヒョウ票が、ポーンと、猿のきんたまに、はねついたと。

「あっちゃ、あっちゃい」と、猿は、たまげて、水屋の水ぶねのどこへ、とんでいって、きんたまをいれたと。こんだは、水ぶねにかくれていた、かにが、グサンと、はさんだと。

「あ、いたたた」と、猿は、さげむしろに、きんたまを、こすりつけたと。こんだは、さげむしろにかくれていた、たたみさし針がシクモクと、さしたと。「いや、これはおおごとだ、家ン中

走ってきたガニ太郎が、ちよきんと猿どんの首をはねました。

（宮崎県宮崎郡・原田亀三郎）

にや、いられん」

と、窓から外へ出ようとしたら、こんだ、窓にかくれていた蜂が、チクリと、さしたと。

「あ、いたたた、いや、もうぞうして、出口をまちごうた」

と、猿は家の出口へとんで出たと。こんだは、出口のどこにいた、牛の糞に、グワ、チャンと、すべってころんだてや。

「これくっさ（これこそ）、おおごとだ」と、起きようとしたれば、こんだは上から米つきうすが、デンと、おりて来て、とうとう、猿を、ふんづぶしてしもたてや。

これで、いちごさけた、どっぺん。（新潟県古志郡山古志村・長島ツル）

これを六つの段どりにわけてみる。

A 猿と蟹の出会いと交換。

B 柿の種の成長。

C 親蟹の死。

D 助っ人登場。

E 助っ人・仇討ち配置。

F 仇討ち。

という流れである。昔話中A～Fの書きこみが、その区切りであるが、この二県の「猿蟹」を比べてみると、もし「昔話は語り手の反映（産物）」であるということをも、一つひとつの昔話にあてはめることができるるとすると、「猿蟹合戦」にも、宮崎県人原田、新潟県人長島のそ

それぞれの人物の一端をかいまみることができまいか。ということ、両者の違いを表化してみた。

表② 採話サルカニ比較表

	D	C	B	A	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○唐臼(戸口の鴨居の上)</li> <li>○蜂どん(戸棚の中)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1個目の青っぱいうらなり柿一つで死ぬ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○柿の種を息子ガニ太郎と時く。</li> <li>○柿の種にも感情・心がある。</li> <li>○二日で柿の実がなる。</li> <li>○(一粒の柿のタネ↓(まく)↓芽↓青い葉↓花↓実)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○無理矢理交換。</li> <li>○脅され仕方なく強引に交換。</li> <li>○暴力的。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>原田 亀三郎(宮崎県)</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ヒョウヒョウ栗(囲炉裏のほどの中)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○3個目の青ずんぼの柿で死ぬ。(はなをつけて↓けつをぬぐうて↓青ずんぼの柿)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○一年かかって柿の実がなる。</li> <li>○(柿ノ種↓芽↓(手入れして)↓柿の木↓柿の実)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○納得すくですんなり交換。</li> <li>○猿が蟹をうまく話にのせ円満に交換。</li> <li>○論理的。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>長島 ツル(新潟県)</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○親蟹の腹から子が誕生。</li> <li>○川へ行き魚を取り、成長。自分から仇討ちへとむかう。</li> <li>○きび団子もついていく。問答しながら助っ人が参加していく。</li> <li>○ヒョウヒョウ栗・蜂・米つき臼</li> <li>・たたみさし針・牛の糞</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○熊蜂の慰めすすめで仇討ちに行く。</li> <li>○卵・コンブ・唐臼どん。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○柿の種自分で時く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○納得すくですんなり交換。</li> <li>○猿が蟹をうまく話にのせ円満に交換。</li> <li>○論理的。</li> </ul>	

F	E
<ul style="list-style-type: none"> <li>○卵↓鼻の先にやけどをさせる。</li> <li>○「そこで走ってきたガニ太郎が、ちよきんと猿どんの首をはねました」↓目の当たりの結末。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○卵どん(戸棚の中)</li> <li>○コンブとガニ太郎(水がめの前)</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>○栗↓猿のきんたまを攻撃する。</li> <li>○「起きようとしたら、こんだは、上から米つき臼が、デンとおりて来て、とうとう、猿をふんづぶしてしまてや」↓余韻のある結末。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○かに(水屋の水ぶねの中)</li> <li>○たたみさし針(水屋の戸口のさげむしろ)</li> <li>○蜂(家の窓のどこ)</li> <li>○牛の糞(家の出口)</li> <li>○米つき臼(家の出口の上)</li> </ul>

話の展開を、仇討ちにポイントをおいて考えてみると、宮崎県は首をはねることを目的にした話とも考えられる。とすると、宮崎県人は温和なといわれている反面・結構シビアな面もあるということを描き出しているともいえる。また新潟県の面白味は、猿の弱点きんたまをねらうところにあるように思われる。絵本においても表③を参照してもらえばわかるように、栗のはねる所、蜂のさす所は再話作家の工夫のしどころであろう。西郷竹彦ぶん『さるかにばなし』(ポプラ社・一九六七)は、「これはたまらんと猿の奴が、かつての裏口からとびだそうとすると、なんの逃がすものかと熊ん蜂が、猿の目んたま右左と、ぶっすぶっすときさした」とする、猿に決定的なダメージをあたえている再話もある。

また仇討ちに行く子蟹の描き方も両県においては、かなり違う。新潟県の話は、親蟹の腹から誕生した子蟹が、川へ行き魚を取り自力で成長し仇討ちへいくという、北国の人々の粘り強さ積極性をくみとれる。

昭和40年代		昭和30年代		書名	A	B	仇討	ち(助っ人)	※数字は助っ人としての登場順番を表す。						
③『さばるかに』 S42	②『さとる』 S35	①『かむかし』 S34	けが型							親ガニの死	きびだん(畑)	はさむ	さす(さす場所)	すべる	きる
	おおけが			○	○	①ばんぱんぐり (背中)	はなねる (はねた場所)	こがにども	②はち (頭)	③うしのふん		④はげば う	5	⑤	6
	①いせいのいいがぐり (尻)	②なかよしのくり (おどかさ)		○	○	①いせいのいいがぐり (尻)	かきのきょうだ	④竹槍かかえた くまんばち (左右の目んたま)	①なかよしのはち (額)	④なかよしのこんぶ		③なかよしのうす	△大きな石うす		

表③ 「猿蟹絵本」助っ人比較表

のに対し、宮崎県の話では、絵本にもあるが、熊蜂の慰めすめで仇討ちにでかけていくのである。人まかせ、受け身の姿勢である。そして結末は、宮崎県の昔話が、ガニ太郎の猿の首をはねるという仇討の現場を目の当たりにすることのできる形に対し、新潟県は、猿がどうなったかわからぬ、聞き手に結果をゆだねる余韻をもたせた結末となっている。

この結末へと至る展開として、宮崎・新潟両県とも「親蟹の死」という段どりがあるのであるが、関敬吾編『日本昔話大成』1動物昔話・24「猿蟹柿合戦」分布においても、佐賀県東松浦郡の一例を除いては、仲直り型は存在しないとす。佐賀県の話は分布によると「猿と蟹がいる。柿の種と握り飯を交換する。蟹は柿の種を植える。蟹がいうとおり柿の木は大きくなって実をつける。猿が木に登って実をとってやるという。猿が熟した実を食い、青い柿を蟹にぶつける。蟹は

けがをする。臼・栗・蜂が通りかかって敵討ちをする。臼は天井から落ち、栗は囲炉裏ではげ、蜂が川に冷しに来た猿を刺す。猿は降参した」とする。この『佐賀百話』(桜楓社・一九七二)の話を除いて山形県最上郡の例話「とうど、渋柿ぶっつけられて、死んでしまったなよは。もんじゃくっちゃねけどは。どんべすかんど・ねっけど」という結末で蟹の死を含むもの、または、猿の尻尾の短い理由・猿の尻(顔)の赤い理由・蟹のハサミに毛が生えるようになった理由と由来譚へ結びつくものの二系統である。

#### 4 再話と助っ人

現在、私達の目の前に存在する猿蟹絵本16点を「助っ人」にしばって検討してみた。

昭和50年代							昭和40年代		
⑬ るかに S56	⑫ るかに ばなし S55	⑪ るとか に S55	⑩ るかに S54	⑨ るかに S54	⑧ るかに S52	⑦ るとか に S51	⑥ るかに S51	⑤ るとか に S49	④ るかに S45
	大けが				おおけが				
○			○	○		○	○	○	○
○								○	
①ばんばんぐり 〔おでこ〕	②なかよしのくり 〔顔〕		①しばぐり 〔ほおべた〕	②くり 〔尻〕	②なかよしのくり 〔顔〕	②くり 〔顔〕	①きびきびしたくり 〔顔〕	②くり 〔顔〕	②つぶっくり 〔尻〕
かにたち	(参加しない)	かにの仲間	子がにたち	子がにども	(参加しない)	こがにたち	こがに	子がにども	子がにたち
②たたみさしぱり 〔しりっぺた〕	③なかよしのはち 〔赤い尻〕	②はち (×)	③たたみぱり 〔尻〕	①くまんばち 〔肩〕	①なかよしのはち 〔尻〕	①はち (×)	②はち 〔尻〕	①くまんばち 〔尻〕	①大きなくまんばち 〔肩〕
△うしのく そ			△うしのく そ	△うしのく そ			③うしのふ ん	③うしのふ ん	△うしのく そ
③なっきり うぼうちよ			②なっきり うぼうちよ						
④こめつき うす	①なかよし のうす		⑤うす	④石うす	③なかよし のうす	③うす	④でかい うす	④おおきな うす	④うす
		①くりの 木のぐり たちが							
6	③	3	6	5	③	4	5	5	5

		昭和60年代		
		⑬『さ るかに ばなし』 S 61	⑭『さ るかに 』 S 60	⑮『さ るかに 』 S 58
6		○	大げが	○
9	9			
	4			
こ 1	背中1尻4顔6 類1鼻の頭1おで こ	②くり 〔尻〕	②くり 〔顔〕	②くり 〔鼻の頭〕
	不参加 3	子がにたち	子がに	(参加しない)
	頭1額2左.右の目 1肩2尻8不明2	①ニュースをきい たはち〔尻〕	①はち 〔尻〕	③はち 〔おでこ〕
	牛のふん4 牛のくそ4			
	木臼12 石臼3	③うす	③うす	①なかよし のうす
		④	④	③

A げがをする型6点とB親蟹の死を含む型9点、その他1点の、二つの型に大別できる。

A型は仲直り型とでも称せ、結末は、猿と蟹たちとの仲直りをする  
ことで結ばれている。一方のB仇討ち型は、おおよそ猿が臼によって  
つぶされた後どうなったのかわからず、余韻をもった結末となってい  
る。語りの文芸としての昔話の特性の一つを活かした結末である。語  
りの文芸である昔話は、聞き手の想像性にゆだねる側面が強いという  
ことで、余韻をどう再話するかも、絵本としての質が問われてくるこ  
ろである。一般的に「仲直り型」再話絵本には、余韻の乏しいとい  
う点が顕著である。

また、きび畑を作り、きび団子を作りながら助っ人を得ていく展開  
は、①③⑤⑬、四点の絵本にみられるが、いわゆる「桃太郎」鬼退治  
援助者との問答のくたりを想起させるものである。しかし、この再話  
も、長島ツル採話のDにもみられるように、再話作家のみの発想とい  
うことではなく、民話絵本の一特色である。採話を基にし発展させた

再話といえる。

では、どのようなところに再話作家の独自性があるのかと考えてい  
くと、先ずは、

- ①常套句であろう。西郷竹彦『さるかにばなし』が、「昔昔のそのま  
た昔、わしらのじっ様やばっ様の、いやいやそのまたじっ様やばっ様  
が、まだ生まれてもおらなかった、ずうっと昔のこととござった」と  
いう語り始めとしたようにである。また、次には
- ②導入の工夫であろう。木下順二・文『かにむかし』(岩波書店・一  
九五九)は、汐くみの部分から始まり浜辺で柿の種を拾う形や、木暮  
正夫・文『さるかに』(第一法規・一九八一)岩崎京子・文『さるか  
に』(講談社・一九七九)の、蟹がわら束をかついで市に売りに行く  
というように、作家なりの工夫がみられる。導入が、猿と蟹のおむす  
びと柿の種との交換以外のものを設定している絵本である。
- ③そして、助っ人の部分である。

堀尾青史は、松谷みよ子文・滝平二郎絵『さるかに』(岩崎書店・

一九七九)、「お母さまがたへ」において、「またふしぎな組み合わせの助太刀は、刺すーハチ、はじくー栗、ころがすー牛のクソ、つぶすーウスという攻撃的武器の代表です」と指摘している。このことは、子どもの世界でも日常的におこっている一つひとつであると思うが、16点の絵本を検討してみると

○はねる——栗

ただ栗と表現するのみでなく「ばんばんぐり・きびきびしたぐり・いせいのいいがぐり・つぶぐり・しばぐり」と、栗の状態・種類をも加味した表現もみられる。しかし表③をみてもわかるように、仲直り型では、②⑧⑩にみられるように、仲良しの栗・蜂・臼・昆布が助っ人というように、「仲良し」という関係をことばでもって表現しているのである。これも読み手の余韻・想像のさまたげの要素として指摘できる。

○はさむ——蟹

蟹は、兄弟であるとする話、仲間とする話がある。また16点中3点蟹は参加せず助っ人のみによる仇討ちという絵本がある。これら蟹不参加型は⑧⑩⑭と、すべて仲直り型である。

○さす——蜂・針

蜂も、栗同様「大きな熊んばち・竹槍をかかえた熊んばち」と、蜂の中でも熊蜂であると具体化している絵本もある。また蜂ではなく畳さし針がさす例も2点あるが、刺す場所も、顔か尻という例が多い。顔は「頭1・額2・左右の目1」の計4例、そして尻8例で12例となる。絵本であるから、絵で表現したものもあるが、絵・文からもくみとれぬものが2点あった。

このことは、栗のはねる場所にもいえ、背中という絵本もあるが、尻4例に対し顔は「顔6・頬1・鼻の頭1・おでこ1」の9例である。

蜂の攻撃個所は尻の方が多く、栗は顔の方が多いという相違はあるが、どちらにしても、顔か尻をねらうという形が大半である。

○すべる——牛の糞・昆布

牛のフン4例・牛のクソ4例と同数であるが、フンとクソは語感として、「うんち・うんこ」の違いにもつうじるように思う。再話作家にとつて、語り手は音声言語のみであるので語感に対する厳しい姿勢があるということもふまえ、作家の感性の発揮できる大きなポイントといえる。そのことは、臼を木臼・石臼また単なる臼というかにも問われてくる。①③⑤⑥のように「大きな・でかい」という形容を付している絵本もある。

○つぶす——臼

臼は、木臼12・石臼3で、圧倒的に木臼の方が多い。これは臼としての身近さゆえの木臼かとも思うが、重力感という眼からの表現もあると思う。他に

○きる——菜っ切りぼうちょう

○ぶつける——はぜ棒・いが栗

と、これらの助っ人の登場をみると、いが栗達のでてくる⑩の絵本を除いて、助っ人の数が多くなる。採話をふまえた助っ人の登場ということであるが、助っ人は3から6と幅がある。どのくらいが適切かということとは、一点一点の絵本が読み手に語りかけてくることなので、検討するのは無意味であろう。しかし、以上のように考えてくると、行為として、

はねる・はさむ・刺す・すべる・つぶす・切る・ぶつかる

と、子ども達が日常生活の中で体験している一つひとつの行為が、助っ人という形をかりて表れてくる。ということ、助っ人の工夫も「猿蟹合戦」再話の興味をひく一つといえる。

つまり、一般に「猿蟹合戦」という題名が示すように、この昔話は合戦イコール仇討ちにポイントがある話との錯覚がある。しかし16点の絵本の題名をみてもわかるように、この話は「猿蟹はなし」である。つまり前半のA猿と蟹の出会い・交換およびB柿の種の成長の展開なくして、この昔話は成立しないのである。ゆえに合戦という題名を用いないし、かつ絵としても、かなりの枚数をもって表現されるように、柿の種なくしては成立しない昔話といえる。その前半の部分あつての「仇討ち」である。そしてまた、その「仇討ち」の興味をひきたてるのは助っ人である。

とすれば、この助っ人の選択も猿蟹合戦再話のポイントであり、かつ絵本選択のポイントともなりうる。

## 5 まとめ

文学は、多彩な色どりをみせてくれる存在である。年来のテーマである文学の一つとしての口承文芸のかねあいを考えていくと、文学とは・語る文学・聴く文学であり、書く文学・読む文学でもあり、ここにもう一つ最近のマスメディアの発達の中からは観る文学というものも設定する必要がでてきている。

つまり言語伝承による文学を対象としている者としては、語りは、語り手のさまざまな反映の結果としての産物、とすれば文字伝承による文学は、書き手の反映した産物としての作品ということにおちつく。

語り手↓語る↑↓(聴き手) ↓語り↓語り継ぐ(伝承)  
 ⇒  
 (一日・一年・一生を単位と (単数以上の聴き手を対象とした日常生活) 語り)

書き手(作家) ↓書く↓(出版社) ↓(読み手) ↓作品↓読み継ぐ  
 ⇒  
 (家庭生活・社会生活・時代等) (単数の読者にとつての作品)  
 ↓個室の文学

以上の一端を、本考では絵本と民話を対象にすえて考えてみた。

(昭和六一年九月三〇日受理)

### 注(1)

うんちを素材にした絵本は総じて科学的な記述をとっているが、わかりやすい作品が多い。目にしたものとして四点、①『みんな うんち』五味太郎さく(福音館書店) 昭和52年7月1日刊②『うんちのできるまで——食べものの旅——』佐藤守さく絵(岩崎書店) 昭和58年10月28日刊③『うんちがぼとん』アロウ・フランケルぶん絵/さくまゆみこ訳(アリス館) 昭和59年刊④『おはよう うんち』佐賀そおた作/三宅かおる絵(斗夢書房) 昭和60年4月刊である。

### 注(2)

清水美千子著『絵本の世界(3)——幼稚園・保育園児のための100冊——』(一九八六年七月刊) 第二章・絵本100選(その三)にも取り上げられた。清水は、年中児から八極限状況をユーモラスに描くとして「画家夫婦と子息の、いわば合作絵本です。子息の体験に根ざした作品で、便意をこらえながら下校するという極限状況の下での切羽詰まった行動や我慢の限界を語ったのが、子どもたちの共感を得るゆえんでしょう。やわらかい色調の中でデフォルメされた人物の動きがユーモラスに描かれていて好感がもてます。

読みかきかたに当たっては、みおくんの時々刻々の心理状態を押さえておくとよいですね。読了後、子どもたちに体験談など自由に話し合わせみてみてください」と指摘している。